

Chalon, J. J.

Twenty four subjects exhibiting the costume of Paris; the incidents taken from nature.

London, Rodwell & Martin, 1822. (文献番号5-39)

Hiler p.156 Colas 588

シャロン著

パリ服飾に見る24項；ありのままの出来事

24枚の美しい彩色石版画から成る本書は、当時油彩・水彩画家として世に知られていた John James Chalon (1778-1854) の作である。もとは、4回配本のプレート集だったようである。プレートには通し番号がないので、本館蔵本のタイトルは Colas に記載されているそれとは、順番が異なっている。

フォリオ版24枚の版画は、副題のとおり、ありのままのパリの人々を描写したもので、19世紀初頭の彼等の暮しぶりがかがわれて興味深い。多様な人々が描かれているが、特に目立つ主題は、屋外のものや労働者である。とりわけ女性の働く姿は、15の職種中10を占める。呼び売りの姿で「安酒売り」をするのも、「犬の毛を刈る人」も「刺繍職人」も、すべて生き生きとした女性たちである。その他、政治討論をする人、墓参りの親子、煙草を吸う老夫婦などいずれの描写も生命力にあふれていて、その時代の生の人々の姿を見せてくれる。

本書に先だち、シャロンはまた1820年に『パリジャンの風習のスケッチ』も出版している。この時代はとりわけ英国人のパリ・ファッションに対する意識も高まってきたのだろう。バズビーの“Costume of the lower orders in Paris” <383, 135-B> は、パリの呼び売りが27題描かれているが、「水運び」以外は、本書とは異なる主題を見ることができる。当時のパリには様々な呼び売りの声が響き、活気づいていたようだ。この図集には、他の職人図会やプレートには例の少ない絵画的要素が濃厚である。例えば手品師のまわりには、いぶかしげにのぞきこむ婦人や子供、首をかしげる男たち（手品師）、卸売り市場では果物を売る女性のまわりで、値踏みする人や、やりとりを見つめる人々（卸売り市場の女性）などが描かれている。こうしたことで、テーマ以上に、さまざまな情景や服飾が拡大描写されているといえる。

図は「貸し椅子屋の女性」

(室賀 真)

